

雨よけキュウリの地上型隔離床栽培における苗の種類と仕立て方法が初期収量に及ぼす影響  
(緊急要請課題)

野口 貴・海保富士男・沼尻勝人  
(園芸技術科)

---

【要 約】地上型隔離床における雨よけ栽培では、苗は本葉1葉期のセル苗、仕立て方法は子づる3本仕立てが優位であり、品種では「エクセレント節成1号」が優れる。

---

【目 的】

都内では栽培環境の悪化に対応できる簡易なキュウリ隔離栽培技術の確立が期待されている。隔離栽培では、隔離様式、培地の種類および使用量、肥料の種類および施用量、苗齢など苗の種類や仕立て・整枝方法、品種の種類や接木の有無などについての検討が必要である。これまでに隔離様式、培地の種類と使用量、肥料の種類などについて一定の知見を得てきたが、ここでは、苗の種類、仕立て方法および品種についての検討を行う。

【方 法】

隔離床は、防根透水シート、ココピート培地、保水マットなどをフレーム内に設置した地上型の試作システムを用いた(図1)。「夏すずみ」以下4品種を2010年4月1日に55穴または128穴のセルトレイに播種し、前者は本葉1枚期(以下、1葉セル)の4月19日に定植し、後者はポットに鉢上げしてから本葉4枚期(以下、4葉ポット)に定植した。定植は株間30cm間隔で一行に行い、活着後、株間60cm、2条の栽植になるようベッドの左右に振り分けてひもで誘引した。仕立て方法は主枝30節止めの主枝1本仕立て、および子づる3本仕立て(主茎15節止め)の2種類とした。収穫調査は1ヶ月間とし、肥料はOK-F6号を用いて、4月下旬～6月下旬までに株あたり窒素分量で14.5gを施用した。

【成果の概要】

1. 品種「シャープ1」を用いて苗の種類および仕立て方法を比較した結果、収穫果数は苗の種類では1葉セル、仕立て方法では子づる3本仕立てで収穫果数が多かった(図2)。
2. 下物果の内訳を見ると、4葉ポットではほとんどが曲がり果であったが、1葉セルでは尻太り果や尻細り果がみられた(図3)。仕立て方法による内訳の差はなかった。
3. 苗の種類が主枝および側枝の旬別着果数に及ぼす影響をみると、1葉セルでは6月中旬の側枝における着果が多かった(図4)。
4. 誘引枝長は4葉ポットでやや長く、徒長気味に生育する傾向にあった(図5)。
5. 4品種の収量を比較すると、仕立て方法に関わらず「エクセレント節成1号、Vアーチ、シャープ1、夏すずみ」の順に収穫果数が多かった(図6)。なお、可販果(A、B品)数では「Vアーチ」よりも「シャープ1」が勝った。
6. 下物果の内訳を見ると各品種とも曲がり果が多かったが、「Vアーチ」では特に尻細り果の割合が比較的が高かった(図7)。「エクセレント節成1号」は下物果のすべてが曲がり果であった。
7. まとめ：地上型隔離床における雨よけ栽培では、苗は本葉1葉期のセル苗、仕立て方法は子づる3本仕立てが優位であり、品種では「エクセレント節成1号」が優れる。



図1 地上型隔離栽培床による雨よけキュウリの栽培 (左:隔離床の仕様, 右:ひも誘引による栽培)

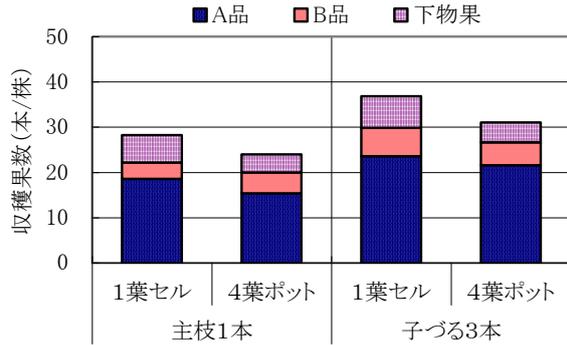


図2 苗の種類および仕立方法が収穫果数に及ぼす影響 (品種は「シャープ1」)

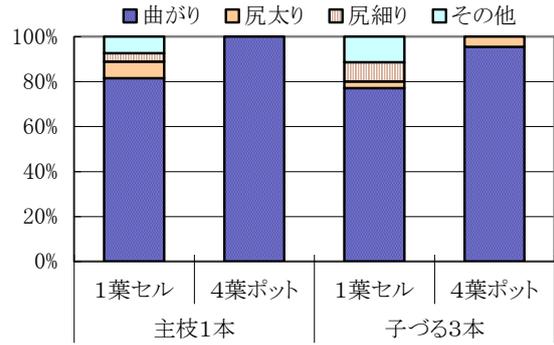


図3 苗の種類および仕立方法が下物果の内訳に及ぼす影響 (品種は「シャープ1」)

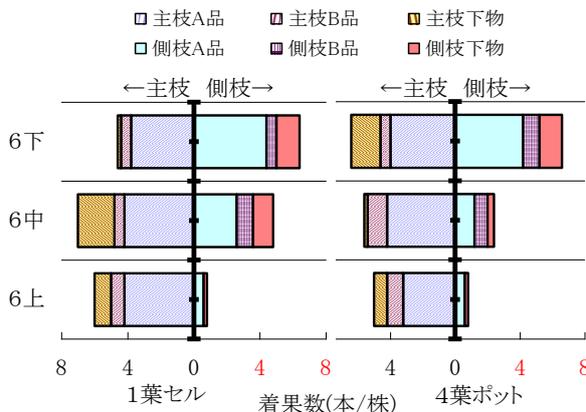


図4 苗の種類が主枝および側枝の旬別着果数に及ぼす影響 (品種は「シャープ1」, 仕立方法は主枝1本仕立)

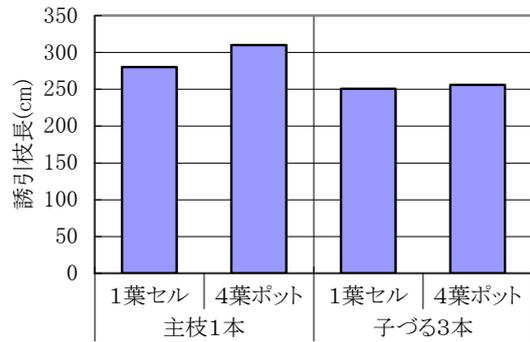


図5 苗の種類, 仕立方法が誘引枝長に及ぼす影響 (品種は「シャープ1」, 主枝1本仕立ての主枝, 子づる3本仕立ての子づるが誘引枝)

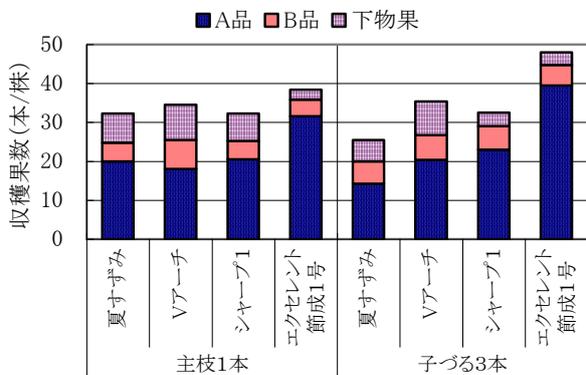


図6 キュウリ4品種の収穫果数

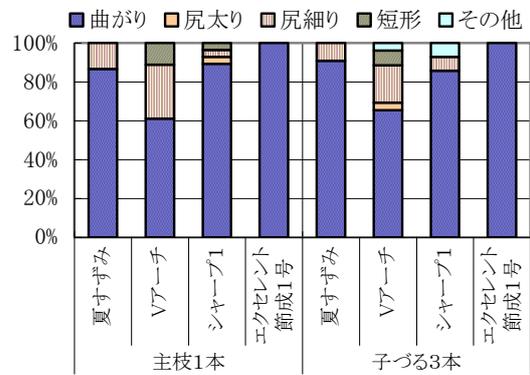


図7 キュウリ4品種の下物果の内訳